

# “Child”の二義性と Peter Pan の特質について ——小説版 *Peter Pan* の場合——

半 田 涼 太

## はじめに

*Peter Pan* は次の一文で始まる。“All children, except one, grow up” (7). “one” とは Peter Pan のことだ。作品の冒頭から、Peter は成長して大人になることがなく、永遠に “child” (「子供」) であり続けることが示される。そしてこれ以降にも、物語の中で、Peter が永遠に “child” であり続けるであろうことが幾度となく示される。

しかし、或る観点を導入して *Peter Pan* の物語を読み進めていくと、興味深いことに、永遠に “child” であり続ける Peter は、或る意味において “child” になれないということが判明する。本論文では、Peter は或る意味において “child” になれないという、これまで指摘されてこなかった彼の特質を明らかにする。

ここで、*Peter Pan* という作品について説明しておきたい。というのも、作者である James Matthew Barrie (1860年～1937年) が生み出した Peter Pan が登場する作品は複数あり、それらは少々複雑な関係にあるためである。あらかじめ明確にしておく、本論文で扱うのは1911年に出版された小説版である。

まず、1902年に出版された *The Little White Bird* の一部に Peter Pan という名前の作中人物が登場する。その後、1906年に、その部分を抜き出した *Peter Pan in Kensington Gardens* が出版された。しかし、これらに登場する Peter Pan は、1911年の小説版に登場する Peter Pan と共通点があるものの、別人物であると言っても過言ではないほどに異なる。また、これらの物語内容に関しても、本論文で扱う作品の物語内容とは異なる。

本論文で扱う作品と最も関わりが深いのは、1904年に初演された演劇の *Peter Pan: Or the Boy Who Wouldn't Grow Up* である。この演劇が小説化され、1911年に *Peter and Wendy* という題で出版された。この小説版の題は、内容が同一でも異同がある。初版以降、*Peter Pan and Wendy* や *Peter Pan* という題で出版されたこともある。さらに、*Peter Pan and Wendy* という題では、学校用読本版として書き改められたものもある。<sup>1</sup>

以上のように、Peter Pan をめぐる作品群は複雑な様相を呈している。先に示したように、本論文では *Peter Pan* と改題され出版された1911年の小説版を分析対象とする。

## 1. “child” の二義性について

まず, “child” という語について検討しておきたい。 *The Oxford English Dictionary Second Edition* を参照すると, “child” には少なくとも二つの異なる意味があることが了解される。“child” の項目に以下のように記されている。

I. With reference to state or age.

2. a. A young person of either sex below the age of puberty; a boy or girl.

II. As correlative to parent.

8. a. The offspring, male or female, of human parents; a son or daughter. This in OE. was expressed by *bearn*, BAIRN.

このように, “child” という語には少なくとも二つの異なる意味がある。一つが “grown-up/adult” (「大人」) と対立関係にある意味であり, もう一つが “parent” (「親」) と対立関係にある意味である。<sup>2</sup> 両者は明らかにその意味合いが異なり, 混用すべきではない。しかし, 時にこれらの二つの意味が混用されることがある。これらの二つの意味をまさに厳密に分けるべき研究においてさえ, この混用が見受けられる。ここでは, Hugh Cunningham の *Children and Childhood in Western Society Since 1500* をその例として挙げよう。

同書は, “child(ren)” という語が指し示す対象の歴史上の変遷を追う研究書である。Cunningham は同書の目的を次のように述べている。

My aim in this book is in part to trace the development of this late-twentieth-century belief that children are real children only if their life experiences accord with a particular set of ideas about childhood. (1)

また, 別の箇所では次のように述べている。

This book, then, will concentrate on three central interlocking themes: ideas of childhood; the actuality of adult-child relations; and the roles of philanthropists and states in regard to childhood. (15)

そして, Cunningham は, 同書において最も重要な概念である “child(ren)” を次のように定義する。

As a working guide, ‘children’ will be taken to mean anyone under fifteen, though in actual fact in nearly all societies people have differed quite substantially in their thinking on the age at which childhood ends. (15)

Cunningham は “child(ren)” を「十五歳未満」と年齢に基づいて定義している。十五歳未満ということは、“child” が持つ二つの意味のうち、“grown-up/adult” の対の意味でこの語を用いていると考えられる。しかし、同書はいかなる断り書きもなく、“parent” の対の意味でも “child(ren)” という語を使用している。そのことが明確に了解されるのが、次に引用する二か所である。一つは次の箇所だ。

In northern and central Europe the norm was the two-generational nuclear family (parents and children) living in a separate household [...]. (83)

この引用箇所には “parents and children” とあり、ここでの “children” は明らかに “parent” の対の意味である。もう一つは次の箇所だ。

[T]he family as a whole might not be a net gainer from having children until the eighteenth year of the marriage. (84)

この引用箇所でも “children” が “parent” の対の意味で用いられている。さらに、先に見たように “child(ren)” を十五歳未満と定義していたにもかかわらず、ここには “the eighteenth year” という語が見られる。

以上のように、同書では “grown-up/adult” の対の意味での “child(ren)” と、“parent” の対の意味での “child(ren)” が混用されている。それだけでなく、Cunningham が定義する “child(ren)” と、それから分析対象の社会において “child(ren)” と見做されていた人々という二つの意味が混用されてもいる。このように、同書ではさまざまな意味の “child(ren)” が混用されており、“child(ren)” の歴史上の変遷を明確に記述できていない。

以上のことから、“child(ren)” が持つ二つの意味を厳密に分けるべきであることが納得される。本論文では、この観点を導入して *Peter Pan* の分析を試みる。

## 2. Peter Pan の諸特質

*Peter Pan* の分析に入る前に、この物語の梗概を記しておこう。

或る日、Darling 一家のもとに Peter Pan という人物が妖精の Tinker Bell と共にやって来る。Peter は Neverland という別世界からやって来たのだった。一家の三きょうだい、Wendy、John、Michael は、Peter と共に Darling 家を飛び出して Neverland へ行く。三きょう代いは Neverland で、もともとそこにいた六人の男の子達と一緒に、家族ごっこをしたり、海賊達と戦ったりして過ごす。三きょう代いはやがて本当の母親が恋しくなり、Darling 家に帰ることにする。その際に、もともと Neverland にいた六人の男の子達も Darling 家に連れて帰り、Darling 夫妻は彼らを養子にする。Wendy や彼女の母親は Peter も Darling 家にとどませようとするが、Peter はそれを断り、Tinker Bell と共に Neverland に帰ってゆく。しかし Peter と Darling 家

の関係はそこで途切れることなく、代々受け継がれてゆくことが示され、この物語は終わる。

では分析に入る。Peter はいくつかの目立つ特質を持っている。他にも挙げることができるが、本論考では次の三つの特質に着目する。すなわち、「大人にならない」という特質、「母親を不要としている」という特質、それから「ごっこ遊びと現実が同じものである」という特質、以上の三つである。

まず、「大人にならない」という特質について検討する。Peter は、本論文の冒頭で言及したように、成長せず、したがって大人にならない。このことについて、Catherine M. Lynch が “Winnie Foster and Peter Pan: Facing the Dilemma of Growth” と題する試論において次のように述べている。“[I]n most versions Wendy comes home, and Peter Pan stays in Neverland. These are the only two possible choices: To grow up or not to do so” (109). しかし、なぜ Wendy が家に戻ることが成長することに繋がり、その一方で Peter が Neverland にとどまることが成長しないことに繋がるのか、この Lynch の試論でも他の論文でも論じられていない。単に Neverland にいるだけでは成長を止めることはできない。その証拠に、Neverland にいる男の子達は Neverland にいても成長してしまう。そのことについて、語り手が次のように述べている。“The boys on the island vary, of course, in numbers, according as they get killed and so on; and when they seem to be growing up, which is against the rules, Peter thins them out; but at this time there were six of them, counting the Twins as two” (60). そこで、本論文では、なぜ Peter が Neverland に戻ることによって成長を回避することができるのかを明らかにする。

次に、「母親を不要としている」という特質について検討する。この Peter の特質が次の箇所では明示されている。“Don’t have a mother,’ he [Peter] said. Not only had he no mother, but he had not the slightest desire to have one. He thought them very over-rated persons” (32). ここで、Peter に母親がいないこと、それから彼が母親を欲していないことが明確に提示されている。

Peter が Wendy を Neverland に連れてきた際の彼の発言からも、彼のこの特質を認めることができる。Wendy を Neverland に連れてきた時に、Peter は Neverland の男の子達に次のように述べる。“Great news, boys, [...] I have brought at last a mother for you all” (76). ここで注目したいのは、Peter が、“you all” のために母親、つまり Wendy を連れてきた、と述べていることだ。“for us all” ではないのである。次の箇所からも、Peter が、自分のためではなく、Neverland の男の子達のために Wendy を連れてきたことを窺い知ることができる。

‘And we are your [Wendy’s] children,’ cried the twins.

Then all went on their knees, and holding out their arms cried, ‘O Wendy lady, be our mother.’

‘Ought I?’ Wendy said, all shining. ‘Of course it’s frightfully fascinating, but you see I am only a little girl. I have no real experience.’

‘That doesn’t matter,’ said Peter, as if he were the only person present who knew all about it, though he was really the one who knew least. ‘What we need is just a nice

motherly person.’ (84-86)<sup>3</sup>

この引用箇所において、双子が Wendy に対して “we are your children” と言ったり、また子供達が “be our mother” と言ったりするのに対し、Peter は “What we need is just a nice motherly person” と言っている。“mother” そのものではなく、“motherly person” と言っているのである。この微妙な違いは重要だ。

このように、Peter は母親を必要としていない。母親を必要としないということは、つまり “parent” の対の意味での “child” になることができない、ということを示唆する。

しかしながら、一見 Peter が “parent” の対の意味での “child” の位置にいるように思えることがある。その一つは、Wendy が Peter を寝かしつけているように思われる場面 (98, 116) だ。寝かしつけるという行為は母親の役割であるように思える。実際に、Wendy, John, Michael の母親は彼らを寝かしつけ (16, 27-28), また Wendy は娘の Jane を寝かしつける (199)。しかし、Peter は寝かしつけるという行為を母親の役割として同定しない。Peter は Neverland に来るように Wendy を誘う際に、彼女に次のように言う。

‘Wendy,’ he [Peter] said, the sly one, ‘you could tuck us in at night.’

‘Oo!’

‘None of us has ever been tucked in at night.’ (42)

このように、Peter は、Peter や他の男の子達を寝かしつけるという行為を、巧妙にも誰の役割であるのか同定していないのである。また、次の Wendy と Peter のやり取りでも、一見 Peter が “parent” の対の意味での “child” の位置にいるように思える。

‘Peter,’ she [Wendy] asked, trying to speak firmly, ‘what are your exact feelings for me?’

‘Those of a devoted son, Wendy.’ (124)

一見すると、この Peter の返答から、Peter は自分のことを Wendy の息子だと思っている、とも考えられる。しかし、これは本心を込めた発言ではない。ここで Wendy は、Peter に二人の関係性を明確にするよう迫っている。それに対し、Peter は、自ら Wendy の夫や恋人として位置を定めることを回避するために、このような発言を行うのである。ここで Peter は実質的に息子の位置にいるわけではない。Peter は、彼に対して Wendy と同様の思いを寄せる Tiger Lily と Tinker Bell にもこのような態度を取る。Peter は三人との関係性において自らの位置を明確に定めず、宙吊り状態にするのである。

Peter は、母親を不要としているどころか、母親というものを嫌悪している。次の一文でそのことが示されている。“For one thing he [Peter] despised all mothers except Wendy [...]” (91). ここで留意しなければならないのは、Wendy は John, Michael, それからもともと Neverland にいた男の子達の母親役を担うが、Peter の母親にはなっていない、という点だ。

Peter は Wendy のことを、自分の母親としてではなく、他人の母親としてみているのである。

Peter は、母親そのものだけでなく、母親に関する話までをも好まないようであることが、次の一文から了解される。“It was only in Peter’s absence that they could speak of mothers, the subject being forbidden by him as silly” (66). また次の一文では、Peter が母親の愛情に関する話さえをも嫌っていることが示されている。“‘If you knew how great is a mother’s love,’ Wendy told them triumphantly, ‘you would have no fear.’ She had now come to the part that Peter hated” (128). さらに、Peter は母親というものをけなしさえする。その様子は次の一文で示される。“‘Come on, Tink,’ he [Peter] cried, with a frightful sneer at the laws of nature; ‘we don’t want any silly mothers’; and he flew away” (188).

このように、Peter は母親というものを少なくとも表面上嫌悪し、必要のないものだと言張する。

しかし、Peter が、実は本心では母親を求めている可能性があることを指摘しておかなければならない。先程「少なくとも表面上」と含みを持たせたのはそのためである。Peter によれば、彼は生まれた日に両親のもとから逃げ出したという (35-36)。そして、家に戻ろうと思った時には遅く、家の窓は閉められ、彼は締め出されていたという (129-130)。そのため、彼は実の母親から拒絶されたと思っている。このことから、Peter の母親嫌悪は、母親を求める気持ちがその当人から拒絶されたことによって反転し、意固地な態度となったものとも考えられる。実際に、Peter は時にこのような意固地な態度を取る<sup>4</sup>。しかし、本論考で要となるのは、表面上だけにせよ本心からにせよ、Peter が母親を不要としているという事実である。

最後に、「ごっこ遊びと現実が同じものである」という特質について検討する。Peter にとってのごっこ遊びと現実の関係性について、語り手が次のように述べる。

The difference between him [Peter] and the other boys at such a time was that they knew it was make-believe, while to him make-believe and true were exactly the same thing. This sometimes troubled them, as when they had to make-believe that they had had their dinners.

If they broke down in their make-believe he rapped them on the knuckles. (81)

語り手は別の箇所でも同様のことを述べている。“Make-believe was so real to him [Peter] that during a meal of it you could see him getting rounder” (90). このように、Peter にとって、ごっこ遊びと現実が同じものであることが示される。

これら三つの Peter の特質のうち、「母親を不要としている」という特質と、「ごっこ遊びと現実が同じものである」という特質が或る時に衝突し、矛盾を起こす。それは、Peter が Wendy 達と家族ごっこをしている時に起こる。

Peter が redskin の人々から “the Great White Father” と呼ばれるようになったことをきっかけとして、Peter, Wendy, John, Michael, それからもともと Neverland にいた男の子達で新たに家族ごっこが始まる。この時、奇妙なことに Peter は父親役を担う。なぜ「奇妙」なのかと言うと、通常、父親であればその人は大人だからだ。したがって、永遠に “child” ——

“grown-up/adult” の対の意味での “child” ——であるはずの Peter が父親役を担うのは奇妙だ。さらに, “He [Peter] is not really our father, [...] [h]e didn’t even know how a father does till I showed him.” (119) という John の発言から, Peter が, 「父親」がどのようなものであるのかを知らなかったようだ, ということが了解される。それにもかかわらず, なぜ Peter は父親役を担うのか。もちろん, redskin の人々から “the Great White Father” と呼ばれるようになったから, という理由もあるかもしれない。しかし, 別の理由もあるのである。

実は, Peter は父親役を担っていることに不安を感じる。先にも述べたように, 父親であるということは, 同時に大人でもあるからだ。Peter はその不安を次のように Wendy に表明する。

‘I was just thinking,’ he [Peter] said, a little scared. ‘It is only make-believe, isn’t it, that I am their father?’

‘Oh yes,’ Wendy said primly.

‘You see,’ he continued apologetically, ‘it would make me seem so old to be their real father.’ (123)

ここで注目すべきことは, Peter が, この家族ごっこがごっこ遊びであることを認識している, という点だ。Peter にとっては, ごっこ遊びと現実が同じものであるはずであった。それにもかかわらず, Wendy を母親とし, Peter を父親とするこの家族ごっこにおいては, Peter はこれがごっこ遊びであることを認識しているのである。このように, Peter の特質に矛盾が生じている。では, なぜ Peter はこのような矛盾を生じさせてまで父親役を担ったのか。この理由は, Peter が永遠に “grown-up/adult” の対の意味での “child” であり続けるためだと考えられる。それはどういうことか, 次章で詳述したい。

### 3. もし母親のもとにいたならば

先程示したように, Peter は家族ごっこにおいて父親役を担う。これは逆からみれば, Peter が “child” の役を, 厳密に言えば “parent” と対立関係にある意味での “child” の役を担わない, ということだ。ではなぜ Peter は “parent” と対立関係にある意味での “child” にならないのか。その理由を究明するための手掛かりを, 次の二つの場面から見出すことができる。一つは, Wendy が, Darling 家と一緒に行くよう Peter を誘う場面にある。自分は Darling 家に行かないと主張する Peter に対し, Wendy が説得を試みる。

‘To find your mother,’ she [Wendy] coaxed.

Now, if Peter had ever quite had a mother, he no longer missed her. He could do very well without one. He had thought them out, and remembered only their bad points.

‘No, no,’ he told Wendy decisively; ‘perhaps she would say I was old, and I just want always to be a little boy and to have fun.’ (135)

この引用箇所では、Peter が Wendy から “To find your mother” と言われ、Peter はそれを断っている。その理由は、“I just want always to be a little boy and to have fun” というものだ。このことから、Peter が、母親のもとにいと成長して大人になってしまう、と考えていることが了解される。もう一つは、Wendy の母親が Peter に養子になるよう説得する場面にある。

Mrs Darling came to the window, for at present she was keeping a sharp eye on Wendy. She told Peter that she had adopted all the other boys, and would like to adopt him also.

‘Would you send me to school?’ he inquired craftily.

‘Yes.’

‘And then to an office?’

‘I suppose so.’

‘Soon I would be a man?’

‘Very soon.’

‘I don’t want to go to school and learn solemn things,’ he told her passionately. ‘I don’t want to be a man. O Wendy’s mother, if I was to wake up and feel there was a beard!’

‘Peter!’ said Wendy the comforter, ‘I should love you in a beard’; and Mrs Darling stretched out her arms to him, but he repulsed her.

‘Keep back, lady, no one is going to catch me and make me a man.’ (192-193)

ここで Peter は、彼を養子にしたいという Wendy の母親の提案を断っている。その理由は、“I don’t want to be a man” というものだ。ここからも、一つ前の引用箇所と同様に、Peter が、母親のもとにいと成長して大人になってしまうと考えていることが了解される。

これらの箇所から、Peter は大人になれないのではなく、自ら望んで大人にならないのだということが了解される。言い換えれば、Peter は大人になろうとすれば大人になれるのである。そして、大人になる、あるいは大人になってしまう方法が “parent(s)” のもとで生活することであり、Peter はそれを回避するために Neverland に戻るのである。

したがって、Peter は家族を持つことができない。もし彼が父親であるなら、Peter 自身が心配しているように、彼は大人であるということになる。そしてまた、もし Peter が “parent” の対の意味での “child” であっても、“parent(s)” のもとで暮らしているならば、やがて成長して大人になってしまい、永遠に “grown-up/adult” の対の意味での “child” で居続けることができなくなってしまう。そのため、彼はいかなる立場においても家族の一員になることができない。物語の終盤に次のような一節がある。

There could not have been a lovelier sight; but there was none to see it except a strange boy who was staring in at the window. He had ecstasies innumerable that other children can never know; but he was looking through the window at the one joy from which he must be for ever barred. (190)



Peter は家族が再会するという美しい光景から締め出されている。彼はそれを窓の外から眺めることしかできない。なぜならば、彼は家族の一員になることができず、したがって家族を持つことができないからだ。その理由は、先程述べたとおりである。

本論文の第1章で、“child”という語には少なくとも二つの異なる意味があることを確認した。Peter は“grown-up/adult”の対の意味では“child”であるが、彼が“parent”の対の意味での“child”になることはない。彼は、“grown-up/adult”の対の意味での“child”で居続けるために、“parent”の対の意味での“child”にならないのだと結論づけることができる。この Peter の特質は、“child”が持つ二つの意味を厳密に分けて初めて導き出すことができるものである。

以上のことから、これまで検討してきた Peter の三つの特質に強弱があることが判明する。三つの特質のうち、「大人にならない」という特質が絶対的なものであり、その特質を守るために、次に「母親を不要としている」という特質、つまり「“parent”の対の意味での“child”にならない」という特質が守られる。そしてこれら二つの特質を守るために、「ごっこ遊びと現実が同じものである」という特質はいったん黙殺されることになる。

Richard Locke が、*Critical Children: The Use of Childhood in Ten Great Novels*において、演劇版と小説版の共通点として主要な作中人物が両者に登場することを挙げている。その際に、Wendy のことを次のように説明している。“Wendy, his [Peter’s] priestess, mother, and chaste would-be bride” (106). しかし、これまでの考察から、小説版に限って言えば、この説明は適切ではないことが明らかとなった。Peter の花嫁であることが“would-be”であるのと同様に、彼の母親であることも“would-be”なのである。Wendy が Peter の母親であることが“would-be”であることを示す重要な場面がある。それは、Peter が時々夢にうなされ、Wendy が彼をあやす場面だ。それは次のように描出されている。

At such times it had been Wendy’s custom to take him [Peter] out of bed and sit with him on her lap, soothing him in dear ways of her own invention, and when he grew calmer to put him back to bed before he quite woke up, so that he should not know of the indignity to which she had subjected him. (146)

Wendy が Peter をあやす様子は、まさに母親のようだ。しかし、Peter は Wendy に母親らしいことをしてもらっていることを知らないのである。あるいは、もし Peter がそれを知ったとしても、他人を寝かしつける行為を母親の役割として同定しなかったように、Peter はこれも母親の役割として認めないかもしれない。

#### 4. 母親の存在を許容する Peter

実は、これまでの考察で明らかにしてきた Peter の特質が作品の最終章で覆される。Wendy と別れた後に、Peter は母親を求めないという特質を捨て去るのである。

最終章では、Wendy が両親のもとに帰った後、月日が経過し、彼女が大人になった時の出来事が語られる。そこに、Wendy の娘の Jane と Peter の出会いの場面がある。それは次のように描出される。

‘My name is Peter Pan,’ he told her [Jane].

‘Yes, I know.’

‘I came back for my mother,’ he explained, ‘to take her to the Neverland.’

‘Yes, I know,’ Jane said, ‘I’ve been waiting for you.’

When Wendy returned diffidently she found Peter sitting on the bedpost crowing gloriously, while Jane in her nightgown was flying round the room in solemn ecstasy.

‘She is my mother,’ Peter explained; and Jane descended and stood by his side, with the look on her face that he liked to see on ladies when they gazed at him.

‘He does so need a mother,’ Jane said.

‘Yes, I know,’ Wendy admitted rather forlornly; ‘no one knows it so well as I.’ (204)

ここで Peter ははっきりと母親を求めており、またそれだけでなく、Jane のことを指して “She is my mother” と断言している。ここに至り、Peter はこれまでの分析で明らかにした特質を捨て去っている。

作品の最後の一文でも同様のことが示されている。それは次のものだ。“When Margaret [Wendy’s granddaughter] grows up she will have a daughter, who is to be Peter’s mother in turn; and thus it will go on, so long as children are gay and innocent and heartless” (206). 語り手は、Wendy の孫である Margaret や、その娘達が Peter の母親になると述べている。あれほど母親を嫌悪し忌避していた Peter が、なぜここに至り母親を持つことを許容するようになったのか。その理由が示されることはない。したがって、それを説明することはできない。もしかしたら、この後、Peter が大人になることが暗示されているのかもしれない。*Peter Pan* には首尾一貫していない箇所が多々あり<sup>5</sup>、これもその一つに数えることができる。

## おわりに

以上、“child” という語が持つ二つの意味を厳密に分けた上で Peter Pan の性質を分析することによって、これまで指摘されてこなかった彼の特質が明らかになった。またそれと共に、“child(ren)” に関する研究を行う際には、“child” という語が持つ二つの意味を厳密に分ける必要があることが明確になった。

Peter は Darling 夫妻の養子、つまり “parent” と対立関係にある意味での “child” になることを避け、Neverland に帰る。そうすることによって、彼は成長することを回避する。その一方で、Wendy, John, Michael は再び Darling 夫妻の「子供」となり、またもともと Neverland にいた男の子達は Darling 夫妻の養子となる。そうすることによって彼らは成長し、大人になる。つまり、彼らは “parent” と対立関係にある意味での “child” になることによ

で成長し、大人になるのである。付言しておく、大人になった彼らに対する語り手の態度は辛辣だ。例えば、語り手は次のように述べる。“All the boys were grown up and done for by this time; so it is scarcely worth while saying anything more about them” (198). 男の子が大人になった時、語り手はその人に対する興味を失い、その人について語ることをやめてしまうようだ。

(本論文は2016年度シルフェ英語英米文学会年次大会において行った口頭発表をもとにしている。)

#### 注

1. これらの作品の発表過程は、水間千恵が『女になった海賊と大人にならない子どもたち ロビンソン変形譚のゆくえ』においてまとめている (159-160頁, 329頁)。より詳細な情報は同書参照。なお、同書では演劇版の題が *Peter Pan: or The Boy Who Would Not Grow Up* と表記されているが、同演劇の初演の際の小冊子の表紙を見てみると、“PETER PAN OR THE BOY WHO WOULDN'T GROW UP” と表記されている。この小冊子の表紙は Andrew Birkin の *J. M. Barrie and the Lost Boys: The Love Story that Gave Birth to Peter Pan* の p. 116 (日本語訳版では130頁) で見ることができる。
2. これは日本語の「こども (子供)」という語でも同様である。例えば、『日本国語大辞典 第二版』でもこれらの二つの意味が区別されて記されている。同辞典には以下のように記されている。「① (親に対して) 子の複数。子ども達。自分の子、人の子に限らず用いる。」「②子。①が単数に用いられたもの。」「④ (大人に対して) 児童。小児。わらべ。」
3. p. 85 は挿絵。
4. Peter Pan が意固地な態度を取っている様子は次の三か所で見られる。一つは、Wendy, John, Michael, それからもともと Neverland にいた男の子達が Darling 家に行くことに決めた時(135)、もう一つは、彼らが Peter のもとを去った後(146)、それからもう一つは、Darling 家に戻った Wendy を再度 Neverland に連れ帰ろうとしてそれが叶わなかった時(194)である。
5. 例えば、その最も顕著なものは Neverland があるとされる場所だろう。Neverland は人の心の中にあるとされながら(11-12)、しかし Wendy, John, Michael は肉体的にそこに行く。そのため、三人の両親や乳母は彼らがいなくなったことを嘆き悲しむことになる。Neverland が人の心の中にあるのであれば、両親や乳母がこのような仕方では嘆き悲しむことはない。また同様に、Neverland が人の心の中にあるのであれば、もともと Neverland にいた男の子達を Darling 家に連れてきて養子にすることはできない。しかしながら、彼らは Neverland から Darling 家によって来て Darling 夫妻の養子になるのである。

#### 引証文献

- Barrie, J. M. *Peter Pan*. England: Puffin Books, 1988.
- Birkin, Andrew. *J. M. Barrie and the Lost Boys: The Love Story that Gave Birth to Peter Pan*. New York: Clarkson N. Potter, 1979.
- Cunningham, Hugh. *Children and Childhood in Western Society Since 1500 Second Edition*. Harlow: Pearson Education Limited, 2005.
- Locke, Richard. *Critical Children: The Use of Childhood in Ten Great Novels*. New York: Columbia University Press, 2011.
- Lynch, Catherine M. “Winnie Foster and Peter Pan: Facing the Dilemma of Growth.” *The Child and the Story: An Exploration of Narrative Forms*. Proceedings of the Ninth Annual Conference of the

- Children's Literature Association University of Florida March 1982. Ed. Priscilla A. Ord.  
Boston: Northeastern University, 1983. 107-111.
- "child." Def. I2a, I18a. *The Oxford English Dictionary*. 2nd ed. 1989.
- パーキン, アンドリュー／鈴木重敏=訳『ロスト・ボーイズ——J・M・バリとピーター・パン誕生の物語』  
東京：新書館, 1991年
- 水間千恵『女になった海賊と大人にならない子どもたち ロビンソン変形譚のゆくえ』東京：玉川大学出版  
部, 2009年
- 「子供」定義①, ②, ④『日本国語大辞典』第二版, 2001年